二〇〇七年十月発行

ARCHIVES

山陽放送報制局
放送ライブラリー
センター

第二十三号

幻の紙テープデジタル化へ

白っぽい方がベース

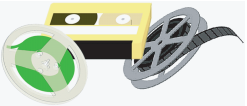
今年の 6 月号でご紹介した通り、音声の記録メディアは 1／4 インチ幅の磁気テープでした。これは薄いテープの表面に酸化鉄の粉を塗ったものです。

欧米ではベースと呼ばれるテープの素材に、早くからプラスチックが使われていましたが、日本では 1950 年代の終わり頃まで和紙が使われていました。ただ、保存性や耐久性の面などから放送局では別のメディアを使っており、局が使い始めたのはベースがプラスチックに替わってからです。このためセンターにも紙ベースのテープは無く、我々は幻のテープと読んでいました。

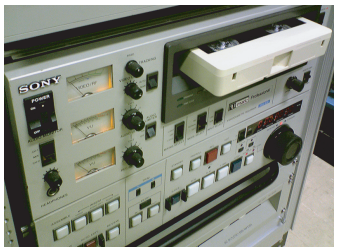
ところが最近、この紙ベーステープを大量にデジタル化して欲しいという注文がセンターに入りました。発注者は岡山県浅口市に本部のある金光教の図書館です。この図書館には大祭や講話の様子が 1／4 インチテープに記録保存されていますが、その多くがこの紙テープだといいます。センターのデッキにかけたところ、再生は可能なようで、これからじっくりデジタル化していくことにしています。

記録メディアの歴史

⑥「U-matic ビデオテープ」



放送局のビデオシステムは 1960 年代に導入されましたが、当時はテープ幅が 2 インチあり 30 分リールでも直径 25 センチ重さ 4 キロもあって、可搬式のデッキに至っては幅 56 センチ、高さ 35 センチ重さ 23 キロと非常に大きく重かったため機動性はほとんどありませんでした。この不便を解消してニュース取材の世界にビデオを参入させたのが、カセット式で幅 3／4 インチのテープを使った U 規格ビデオテープでした。1971 年のことです。



センターにあるUmaticのデッキ

「U」とは、カセットから引き出されたテープが回転式のヘッドドラムに押し当てられるときアルファベットの U の形になるためこの名が付いたもので、U-matic という名は最も売れていたソニーの商品名です。

はじめは民生用として販売され、ドラマなどのビデオソフトも売り出された U-matic ですが、大型で金額が張るために民間には普及せず、むしろ即応性があり再利用できるため、フィルムコストの低減を図るアメリカのテレビ会社で採用されて爆発的な伸びを示しました。電子的にニュースを取材するための媒体「Electronic News Gathering」略称「ENG」という呼び名もこのときに生まれました。

製品のほとんどが日本製であったにもかかわらず、日本のテレビ会社へ普及したのは 1970 年代半ば以降で、山陽放送には 1977 年春から導入されています。テープの幅から「シブサン」の愛称で親しまれ、ベータカムコーダーの普及する 1980 年代半ばまで放送局の主流規格でした。

月刊アーカイブズHPにアップ

創刊号以来の月刊アーカイブズを放送ライブラリーセンターのホームページにアップします。トップページの索引の中にある月刊アーカイブズのボタンをクリックしてください。ＰＤＦファイル化されたアーカイブズを見ることが出来ます。

一昨年の創刊以来、あちこちからバックナンバーが見たいと要望がありました。特に著作権豆知識についてのお問い合わせが多く、昨今の世情を反映していると思われますが、各号はワードのファイルとしてパソコンの中に保存されていたため、いちいち印刷してお渡しするしかありませんでした。

アップされたアーカイブズは誰でも見ることが出来るため、センターの人事や予算に関わる部分は削除し、かわりにセンターのシールがはってあります。悪しからず。